11/3
赤旗

私たちの本気が伝わった

戦争法廃止へ 今言わなければ

作家・活動家 雨宮 処凛さん

安保法が可決されたその日のうちに、日本共産党から「国民連合政府」の提案が出されたことに感動しました。9月19日未明、白票（賛成票）と青票（反対票）の差に、絶望を見せつけられた気がしました。何カ月も国会前や全国で上げた声が届かなかった、と本当にがっかりしました。でもすぐに提案が出され、私たちの本気が伝わったんだと、うれしかった。

学生たちは、奨学金や学費、ブラックバイトなど、自分たちの生活感の中から、経済的徴兵制の危険や貧困が戦争につながることに気付いています。だからこそ、彼らは戦争法に反応したし、反貧困デモにも参加しています。

あまみや・かりん　1975年生まれ。反貧困ネットワーク世話人。著書に『生き地獄天国』『生きさせろ！難民化する若者たち』『14歳からのリアル』ほか

若者が引っ張る

先日、反貧困の集会でキャバクラユニオンの女性が実態を報告しました。中卒で16歳で出産、子どもが3カ月の時に働かなければならなかったシングルマザーが、「戦争法はとんでもない」と発言しました。子どもの危機だ、これではいけないと声を上げたのです。

この数カ月で一気に変わりました。以前はデモや集会をしても、若者の姿はほとんどありませんでした。それでも、平和や9条の問題でずっと地道にやってきた人々の努力が結実しました。そして今は若者が運動を引っ張っています。

高校生が、「18歳選挙権で安倍政権を引きずり下ろす」とスピーチしていました。若い人の投票率が増えることは、与党にとって恐ろしいことでしょう。「国民連合政府」で共闘の道筋ができました。1議席でも多く、与党からもぎ取らなければなりません。

空気変える言葉

安倍政権にここまでの暴走を許したのは、簡単に忘れてしまう国民の落ち度です。数年で安保や自衛隊をめぐる状況はぞっとするほど変わりました。ようやく、SEALDsのような空気を変える言葉が出てきました。参院選まで1年もありません。夏までのロードマップを具体的につくる時期です。忘れさせないためにことあるごとに言い続け、最大限の力を発揮しましょう。

聞き手　米重知聡
写真　縣　章彦